

1

a

善意

b

機関

c

簡便

「力こ

3 生物学

4 A

イ

B

エ

C

オ

D

ア

5 ③ ト

⑦ ク

6 (記述題)

7 「人」え方

8 (記述題)

(完答)

(完答)

9 ウ

10 I

I 感情尊 II 今の自

(完答)

2

1 a

推挙

b

拝借

c

不得要領

2 ア

3

しかし

4 A

らち

B

いろ

C

すが

5 (記述題)

6 エ

7 エ

8 エ

9

百姓の子

10 発見

11 自ら待つ

(完答)

1

集	団	的	な	決	定	は	権	力	に	よ	る	強	制	で
行	う	し	か	な	く	な	り	、	権	力	者	の	主	観
に	よ	る	切	り	捨	て	を	正	当	化	す	る	か	ら

(同意可)

2

さまざまな立場や説の中から論争によって「より正しそうな答え」の合意をつくっていくのが科学であり、最先端の研究が行われている現場は、そのような合意がないということだから。

5 学問は知ることの喜びにもとづくもので、学問することそのものに意義があるのであって、決してその他の利得のための手段なのではない。

(同意可)

「配点」	1	1	1	1
その他	6	8	2	2
	5		5	
	各4点×14	各6点×3	各2点×13	各4点×18
	56点	18点	26点	72点

- 1 a 「善」の字形について、横棒の本数や貫くことなど気をつけること。b 「機関」は同音異義語に注意する。続く箇所では各省庁の審議会などが挙げられているので、「期間」はあたらなない。c 「簡便」は「簡単・便利な」ということ。手取り早いという意味で用いている。
- 2 (6-1) 後半の「では、どうしたらよいのでしょうか」という箇所からが解決策に入る箇所だとすれば、問題点を指摘しているのはそこまでの部分だと考えられる。意味段落のまとまりに注意して読みつつ、直前の段落に「つまり」以下問題点のまとめがなされていることに注目しよう。
- 3 疑問だと考える一般の考えに対して、筆者の見解を問われているので、(6-2)にまとめられている「結論」から探すが筋がよい。問いの「前提」という言葉は探す際のヒントにもしてほしい。ヒトという種の生物学的特性は共通だし、それはたんに「人それぞれ」≡全員違うと言えるほど小さくないと筆者は考えている。

- 4 (A)は「それほど違っているのか【も】疑問です」に注目する。(B)と(D)はセットで「たしかに」↓「しかし」の譲歩構文になっている。(D)以下が本文での本論である。(C)は具体例が続いていることから判断すればよい。
- 5 外来語の問題。③も⑦も現在の社会では非常に一般的に用いられる語なので、つねに身近なニュースや社会のことにはアンテナを張っておこう。
- 6 直後に「なぜなら」からです」があるので、これを軸に考えを進めればよい。「選択は力任せに行うしかない」が答えの中心となる。次段落にも「つまり」から始まるまとめがあるので、そこを利用することで、「権力者が喜ぶ」につながるよう、「権力者の主観による切り捨てが正当化される」ことに触れてほしい。また、「みんな」「大多数の人々」など、集団であることを示唆する表現があるのは、多様な意見が存在する集団的な決定であることを前提にしている(一人しかいなければ問題は起きない)。◎の文に「さまざま」とあるのでわかるだろうが、念のため明示できると万全である。
- 7 「普遍主義」の反対は「相対主義」であった。相対主義の前身は冒頭に書かれている。
- 8 傍線部からの二段落をまとめればよいだろう。「一枚岩」は「意見がまとまっていること、見解が一致していること」。したがって、科学者の意見が一致していない状態について説明する。
- 9 「結局、わかりあえないな」と思ったときにいう言葉である。「対話はここで終了です」も、対話で正しさを作っていくと考えている筆者にとってはマイナスのニュアンスを含んだ表現だろう。
- 10 同じ段落の中身を編集する。「成長するためには傷ついてナンボです(≡傷つくことが必要です)」とあるので、「成長」と「傷つく」を具体化していったってその間を埋めればよい。

2

- 1 a 「推挙」は、推薦すること。b 「拝借」は、字義通りには借り受けること。ここでの用法ではないが、無断でもらってしまうことを言うこともある。「拝」の字形、とくに横棒の本数には気をつけよう。c 「不得要領」は、読み下せば「要領を得ない」となり、よくわからないことを意味している。
- 2 「適当ではない」に注意。直後に書かれていることと対照していったって消し込んでいく。アは一般論として正しそうなことだが、本文で述べられているわけではない。
- 3 傍線を含む一文では「身分の垣根が取り払われ」「四民はく平等となったはずであるのに」と書かれているので、身分のことにも触れた箇所が望ましい。「百姓の子」だからといって「恐懼の体」をとってしまふのだが、それでは話が先に進まない。
- 4 A「らちが明かない」は、ものごとがいつまでたってもはかどらない、進展しないこと。B「色めき立つ(色めく)」は、緊張や興奮などのために落ち着かなくなる、活気づくこと。C「ためつすがめつ」は、あちこちの向きからよく見る様子。
- 5 次段落が「富太郎にとって、学問は」と始まっているので、ここからの部分をまとめていく。本文全体を通して精力的に学問に向かう姿や子どもたちへの期待が描かれているので、そういった「知ること／発見の喜び」という要素も入れられると、学問をどういうものと考えているかがわかり、筋が通るだろう。
- 6 「購いたい書物はく山々のごとく連なっている」「また山が現れ、しかしその書物では」などとあるので、「山」という比喻は「書物」を指していると言える。
- 7 富太郎の考える学問は、世間の思惑のような立身出世の道具ではないのであった。そういう人物から見ると、「サムシングを孕ん」だ「不正解」は非常に興味深いのである。「目をしばたかせ」は「意外・驚き」の表現である。
- 8 生徒たちは富太郎と異なり、「正解」することが当然よいことだと考えている。また、「またもや」とある通り、冒頭の場面にあつた「黙り込んでしまう」姿勢のことをその心情・表情などを含めて「熟柿」にたとえているのである。
- 9 傍線部のいずれもが「百姓の子」ならではの粗末な衣装や姿形・匂いである。ただ、ここでは冒頭場面のような「悪しき慣い」としてではなく、むしろオリジナルな考えがあり、かつそれを思い切って発言したという前向きな様子として(富太郎が)とらえていることが「日なたの匂い」などからもわかる。
- 10 二字の言葉という指示がなければ、直後を用いて「この世がいかに面白い事どもできているか」を「知っ」た、とでもいえるだろう。そのようにそれまでと違ったもの見方に目を開かれたことを表す言葉として直前の「発見」を取ってくる。
- 11 「おおい、聞きゆうかあ」といっても「やれやれ」というように誰も聞いていないのであるが、「教えること」は「一方的に伝えることではない」と考えている現在の富太郎には必ずしも悪いこととは思われていないだろう。問いの答えは「」「」ことが子どもたちを変えたい」とあるので、「教えること」の言いかえが入るはずで、「一方的に伝えることではな」く何なのか、その中身を述べた箇所から取ってくればよい。